

國學院大學学術情報リポジトリ

天保期における伊東玄朴塾「象先堂」の蘭学修業：
佐賀藩蘭学者金武良哲「江戸日記」の分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西留, いずみ, Nishidome, Izumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000417

【研究ノート】

天保期における伊東玄朴塾「象先堂」の蘭学修業

—佐賀藩蘭学者金武良哲「江戸日記」の分析—

西 留 いずみ

はじめに

本稿は近世後期の佐賀藩蘭学者金武良哲の江戸における蘭学修業について考察するものである。金武は佐賀藩蘭学の鼻祖である島本良順から手ほどきを受け、出府して伊東玄朴・象先堂の門人となった。伊東玄朴は長崎にて和蘭通詞猪俣伝次右衛門やシーボルトに学び、出府して象先堂を開いた蘭方医である。後に幕府の医官となり、幕末に活躍する蘭学者たちを育成し、安政年間には仲間と共同出資でお玉が池種痘所を設立したことも著名である。本稿では佐賀県立博物館に寄託されている金武良哲文書の中にある伊東玄朴・象先堂での修業日記を分析し、近世後期の蘭学塾における修業がどのようなものであったのかを具体的に考察するとともに天保後期象先堂の様相も探りたい。

近世後期における佐賀藩の蘭学は藩儒古賀穀堂や彼に幼い頃から薫陶を受けた十代藩主鍋島直正が蘭学に執心であり、当初医学を中心として受容された。²文政期には長崎で蘭学を修めた島本良順が城下で蘭学塾を開講、伊東玄朴や金武良哲、大庭雪斎などの門人を育てたが漢方主流であった当時は日の目を見ることはなかった。³しかし古賀穀堂が『学政管見』で提言した藩立医学校が天保五（一八三四）年に開校し、島本良順が寮監となったあたりから徐々に蘭学に対する機運が高まった。⁴そのように当初医学において受容された蘭学は幕末に近づき海外情勢が緊迫する中、長崎御番の国役もあり、軍事科学にその焦点が移されてゆく。⁵そのため佐賀藩の蘭学研究は反射炉や大砲鑄造のために必要不可欠な学問として軍事科学面での功績が強調され藩政史の中で論じられてきた。杉本勲氏の『幕末洋学における西南雄藩の位置』⁶がその代表

格であろう。杉本氏は「佐賀藩の蘭学は他藩とくらべて医学から軍事科学への転換が、比較的早期にしかもきわだって行われたところに大きな特徴があると思われる」と指摘している⁷。青木歳幸氏はそう言った側面を部分的には認めつつも医学ともどもあいまって発展したと論証⁸、かつ地域蘭学的見地からの総合的な研究も進めている⁹。蘭学を藩政の中、地域全体の中で大局的に捉えることは重要であるが、個々の蘭学者たちがどのように新しい知識を積み重ねたのかという知識形成に関する研究も必要不可欠である。それは近世後期から明治期にかけての急速な近代化を考える上で重要な視点である。知識形成に焦点を当てた研究については近年では海原亮氏が福井藩府中領医師の京都遊学について日記史料を素材とした研究成果をあげている¹⁰。私塾に焦点を当てた研究としては海原徹氏の『近世私塾の研究』がある¹¹。しかし近世後期、蘭学が最も盛んであったと言ってもよい佐賀藩の蘭学者についてその知識形成を具体的に追った研究は少ない。玄朴に関しては孫である伊東栄氏の『伊東玄朴伝』¹²があり、近年では佐賀偉人伝の一環として青木歳幸氏の『伊東玄朴』も刊行されたが、玄朴の蘭学教授については史料制約もあり研究されてこなかった。金武良哲については子孫の池田正亮氏の『金武良哲』¹³が詳細を伝えるが私家版でもあり研究を目的とした体裁で書かれたものではない。高田誠二氏の「久米邦武

と金武良哲の物理学手稿」¹⁴が管見では金武を扱った唯一の論稿であるがこれも久米邦武を中心に据えた研究となっている。

今回金武の象先堂における修業日記という貴重な史料を活用し、その修業内容を分析することによって当該時期の蘭学者の知識形成の一例、さらに象先堂の教授内容、同塾周辺の学問ネットワークについて明らかにしたい。

一 伊東玄朴と金武良哲の蘭学修業

伊東玄朴は佐賀藩出身で天保のはじめ江戸に蘭学塾・象先堂を開き坪井信道、戸塚静海とともに江戸の三大蘭方医と称された医者であり蘭学者である。寛政十二（一八〇〇）年、肥前神崎郡仁比山不動院の被官にして農業を営む父執行重助の長男として生まれた¹⁵。十三歳の時に仁比山不動院の住職玄透について漢学を学んだ後、医学を志して十六歳で隣村小淵の漢方医古川左庵に師事した¹⁶。地元で漢方医として開業後、蘭方を志し佐賀城下蓮池町で蘭学を教授していた佐賀藩蘭学の鼻祖島本良順の門人となる¹⁷。文政五（一八二二）年、蘭学の本場長崎に立、和蘭通詞猪俣伝次右衛門の元でオランダ語を学ぶ。翌文政六年、オランダ商館付医師としてシーボルトが来日、玄朴は猪俣の許可を得てシーボルトにも師事する¹⁸。この経緯を見ると最初の蘭学の師は島本良順である

が彼の元で学んだのは数か月にすぎない。玄朴が和蘭語を習得したのは猪俣伝次右衛門門下、蘭方医としての基礎を築いたのはシーボルト門下時代であったと言えよう。そのシーボルトは文政九（一八二六）年二月江戸に立、將軍家齊に謁見している。玄朴も同年、猪俣伝次右衛門一家とともに出府する。通説ではシーボルトに同行して出府したと言われるが、伝次右衛門の長男源三郎が江戸の天文台詰通詞に任命されたためであり、シーボルトの江戸参府とは直接の関係はない。実際、シーボルトの江戸参府日記には同行した人々の名前、人相、性格なども詳細に記載されているが猪俣一家の名も玄朴の名前も登場しない。

出府後玄朴は天文台役方で蘭学を講じたと言われる。⁽²³⁾天文台役方で蘭書を講じるとはどのようなことを意味するのか。従来玄朴について論じられる際この点について掘り下げられることはなかったが、玄朴が医師として蘭学者として江戸で名を挙げる過程で見逃すことのできない出発点であると筆者は考える。のちに玄朴の義兄となる猪俣源三郎は文政九（一八二六）年六月から同十一年末まで天文台詰通詞を務めているが、天文台詰通詞の勤務内容について片桐一男氏が立石得十郎の「諸書留」を例に引き「天文台方詰通詞は役宅において「内弟子」をとっていた」こと、そこで「通詞が江戸の蘭学者に教授したオランダ語の影響は特筆に値する」ことを指

摘している。⁽²⁵⁾「天文台役方で蘭書を講じた」とは共に出府して来た玄朴が猪俣源三郎の助手として役宅で蘭語教授を行っていたことを指す可能性が高い。源三郎は蘭学に執心な古河藩家老鷹見泉石宅にも頻繁に出入りし、求めに応じて蘭書や海外からの渡来品を調達していた。⁽²⁶⁾このような天文台役宅での生活は天文台役員やその一局である番書和解御用の人々をはじめ、江戸在住の蘭学者、また蘭学に執心な幕臣たちとの交流を可能にしたことは疑いない。江戸へ出てきたばかりの駆け出し蘭学者にとっては人的、学問的便宜を広げるという意味でまたとない有益な環境であり、この時期に後の玄朴の活躍とネットワークの地下が醸成されたことは確かであろう。

玄朴は文政十一（一八二八）年、知己であった蘭学者青地林宗に五両借り本所番場町にて医業を開き、蘭学の教授も開始した。⁽²⁷⁾子供の馬脾風（ジフテリア）を完治させたことをきっかけに患者が急増、⁽²⁸⁾文政十二（一八二九）年、下谷長者町に移転、徐々に名を挙げる。⁽²⁹⁾天保二（一八三一）年十二月には江戸在住にして佐賀藩主鍋島直正に一代侍として抱えられる。天保四（一八三三）年には下谷御徒町泉橋通に転居し象先堂を開塾する。⁽³¹⁾

象先堂の束脩料と塾則を次にあげる。

象先堂入門式

- 一 束脩金貳百疋 一 扇子一箱 右先生
 - 一 鼻紙料金百疋 右奥方
 - 一 金五十疋 右若先生
 - 一 金五十疋 右塾頭
 - 一 金二百疋 右塾中
 - 一 金五十疋 右僕
- 象先堂塾則

- 一 蘭書並び翻訳書之外雜書類読候事一切禁止
 - 一 飲酒雜談堅無用
 - 一 外出一月五回之外決而不相成、若不得止事遅刻止
 - 一 宿之節者請人より印鑑付之書状持参之事
 - 一 入湯髪結者一々奥え相届札差出帰塾之上無失念札
請取可申事
 - 一 毎朝五ツ時迄奥え札差出夜四ツ時請取可申事
- 右件々相背候節は廿日禁足並調合処当直直可相勤、若
及再三退塾之事³⁵⁾

この入門式を見ると象先堂入門時に金六五〇疋必要であつた。同時期、江戸で開塾していた坪井信道の日習堂は金二五〇疋³⁴⁾余であるから二倍以上であつたことがわかる。緒方洪庵の適塾には入門式の記録がないが、事実上分校である緒方郁藏の独笑軒塾は入門時必要な額は金三五〇疋³⁵⁾であつた。象先

堂の束脩が高額であることは指摘されるところであるが、それでも四百人からの門人がいたのは、玄朴が当時高価で入手困難な蘭書を多数所持しており、それを読めることが入門者の重要な動機付けになっていたと言われている。塾則を要約すると、蘭書、翻訳書以外の読書は禁止。外出は一カ月に五回まで、門限に遅れた場合は請人の印鑑と書状が必要、入浴・髪結は届けること、朝八時に札を出し夜十時に札を受け取ること、違反者は二〇日間禁足、繰り返す場合は退塾、と言った厳しさであつた。

象先堂の門人録には四〇六名の名前があり、出身地で多いのは肥前を筆頭に武蔵、出羽、陸奥、伊予、下総、長門と言つたあたりである。ほぼ全国から入門者があつた。著名な門人を挙げると武田斐三郎、津田真一郎、松木弘安、柴田収蔵、肥田濱五郎、神田孝平など³⁶⁾がいる。佐賀藩出身者は四五名と一割強を占め、杉谷雍介、佐野常民等³⁷⁾がおり、佐賀藩蘭学の興隆に玄朴が役買つたことが推察される。

さて本稿で分析する象先堂の修業の対象となる金武良哲(二八一―一八八五)は、佐賀藩の医学館である好生館や精錬所で活躍した蘭学者である。城下六座町の鋳職人の息子として生まれた。鋳職とは鑄造・鍛造・彫金・象嵌・七宝などの方法により金属を細工する職である。幼友達と将来の夢を語り合つた際、侍になると宣言したと言われ、³⁸⁾まずは漢方医

の学僕となった。天保元（一八三〇）年頃には蘭方医・島本良順（龍嘯）の門人となり蘭学を学び、天保十（一八三九）年、江戸の伊東玄朴に入門した。

江戸修業の契機は明らかではないが、その事情を推測させるものに堤柳翠の事例がある。堤は金武と同じ島本良順の門下生で、佐賀藩の支藩小城出身である。彼が象先堂に入門する際の経緯が『小城藩日記』に記載されている。

一 堤柳翠分左之通願有之候所、御当役御聞届之上、願之通被仰付候、但右者先達而御当役限二而相済候二付、其段江戸注進相成居候

奉願口上覚

私儀、医業之儀茂如願被差免置難有仕合、御蔭を以、土佐殿家中嶋本龍嘯江隨身稽古罷在候、然所此節同人同心之由二而江戸表下谷和泉橋住居罷在候御本家御家中伊東元^{モト}と申人、当時可然門弟茂無之、反の手支居候趣を以、誰差越呉候様、右龍嘯迄申越、幸之折柄二御座候故、此御方御支無之候ハ、彼地罷登稽古仕間敷哉、爰切同人相勤申候二付、可相成儀御座候ハ、何卒出府隨身仕度、且家業方之儀も師家二相尋稽古仕度御座候条、当節分向五ヶ年之間御暇被為拝領被下度奉願

三月九日

一 堤柳翠分左之通書付差出候所、御当役御聞届相済、佐賀表江御切手乞受相成ル

奉願口上覚

私儀、為医学稽古江戸下谷和泉橋住居被罷在候御本家御家中伊東玄と申人江隨身稽古仕度御座候条、当申分向子ノ年迄五ヶ年限御切手被仰請被下度奉願候、勿論、於向々無作法之儀不仕出、彼地罷着候ハ、桜田御屋敷江点合罷帰候節ハ、御留守居方分付状を取、右年限内罷帰、御切手同前自身指出返上可仕候、若緩之儀茂候ハ、我々可被承候、此段筋々御相達致御頼候、以上

申三月

一類

願主 安本源太左衛門 判

候、勿論往来之路費、其外自覚悟二而聊茂御上奉掛御難題候儀者無御座候条、彼是之趣何分御仁恕之御吟味被成下、如願被為聞召啓被下候様、筋々宜御相達深重奉頼候、以上

申正月

堤柳翠

持永治兵衛殿

中島文藏殿

持永治兵衛殿

中嶋文蔵殿

堤柳翠

要約すると、江戸の伊東玄朴より嶋本龍嘯（島本良順）のところに、しかるべき門人がいないので誰か差し向けてくれないかと依頼があり、それを受けて島本の門人であった堤柳翠が天保七（一八三六）年旅費等は自費で賄うので五年間の医学修業を藩に願ひ出ている。この史料について青木歳幸氏は「天保七年頃、まだ門人も少なかったことがわかる」⁴²「伊東玄朴門人の増加に、もと師匠の島本良順の斡旋があった」と述べているが、実際は逆で、玄朴の医業が繁盛して多忙なので誰か頼りになる将来有望な門人を送ってほしいと言っていると考えられる。というのは以下の理由による。まず金武が象先堂に入門したのは堤柳翠の三年後であり、その間、門人は三五名増加している。⁴³退塾した門人がいたとしてもかなりの増員があったと考えられる。多数の患者と門人を抱え医業・塾業ともに玄朴を支える人材が必要であったことは想像に難くない。実際、金武は入門後約一か月で代診を開始しているのである。つまり、単なる修業目的ではなく玄朴の補佐的役割を期待されていたと筆者は考える。

なお金武は出府の後に天保十二（一八四一）年末、帰藩し⁴⁴

佐賀城下伊勢屋町に居住後、弘化元年中町へ転宅する。⁴⁵のち、金武は象先堂での修業で得た知識や医者としての実績を認められて、蘭方医、蘭学者として藩内でも徐々に用いられていたのではないかと推察する。弘化元年から二年頃、鍋島直正の庶兄で請役（家老）でもあった須古の領主鍋島安房の家来となる。弘化四（一八四七）年には医学館の蘭学頭取に任じられる。⁴⁷嘉永二（一八四九）年引遠方懸合に任じられる。⁴⁸安政六（一八六二）年、佐賀藩医学校好生館の指南役を命じられ、文久二（一八六二）年、安房家来として三人扶持を賜っている。⁵⁰元治元（一八六四）年には佐賀本藩に召し出され、一代侍として五人扶持を賜る。⁵¹慶応三（一八六七）年、好生館教導方本役を命じられる。⁵²明治四（一八七二）年、精錬所仕組方出仕。⁵³同十五（一八八二）年、引退。⁵⁴同十七（一八八四）年に病没、死去に際し鍋島直大より祭祀料金百円を賜る。⁵⁵

二 江戸における金武良哲の代診

金武良哲は天保十¹十一（一八三九²一八四一）年、伊東玄朴の象先堂で修業し、その間の日記を残している（以下これを「江戸日記」と呼ぶ）。金武が二九歳から三二歳の日記で現在、佐賀県立博物館寄託「金武良哲文書」の中にある。形態は横半帳で十三丁から為り、表紙に「寛永十九壬午、長崎御番御受取之初之」と書かれている。「天保十年亥八月朔

日、佐賀出立」に始まり、最後は「天保十二年十一月十五日、江戸発足、極月十八日佐賀着、天保十三壬寅二月廿五日、父忠左衛門卒、天保十四年癸卯」で終わる。日記の各丁の冒頭に、「ア」、「ベ」、「セ」：（以下略）とオランダ語のアルファベットが書き込まれている。その意図は不明であるが当時の金武のオランダ語に対する意気込みが感じられ「江戸日記」が修業日記であったことが想像できる。金武は象先堂において塾主伊東玄朴の代診を頻繁に行っており、その合間に塾内外で蘭書の会読を行っている。日記には修業の内容や塾内外の門人との交流、日常生活、玄朴の家族関係等が記載されている。以下「江戸日記」の中から代診と会読の内容を拾い出し分析を加える。

「江戸日記」中の代診記録を表1にまとめた。それを元に以下に治療対象者、その居住地、病気の種類、治療内容、薬剤について各々みてみよう。

まず、治療対象者であるが治療延べ人数（天保十年十月～十二年五月の間）は大人五二名、子供十三名である。そのうち武家（家族含む）は大人三四名、子供八名であった。町人（家族含む）は大人十八名、子供五名である。身分が不明な者については、苗字がある者を武家とした。この結果からみると治療対象者は武家中心であり、町人の中では大坂屋、都屋、尾張屋、近江屋、房州屋といった商家の家族が多い。金武が

最も頻回に診察している松平内記は、天保十一（一八四〇）年の「武鑑」に浅草新堀バタ居住で三千石の寄合衆として記載されている。⁽⁵⁶⁾居住地も象先堂から非常に近い。金武は内記のみならず、彼の屋敷内に居住している家来や使用人の治療にもよく出向いている。歌人、日本画家と言った患者も診察しているが、その中の一人菊地容齋は伊東玄朴夫妻の肖像画も描いており、『伊東玄朴伝』の挿絵にそれを見ることができ⁽⁵⁷⁾る。代診の金武でこの患者層であれば、玄朴自身の患者は更に上層の武家中心であったと推察される。

次に患者の居住地を江戸切絵図と照合すると、象先堂の周囲、佐賀藩の上屋敷である桜田屋敷、中屋敷である溜池屋敷の周囲に分布しており、往診に出向く範囲がそのあたりであったことがわかる。

病気の種類を代診記録・表1から分類すると、胃腸病三件、眼病三件、頭痛三件、胸水三件、痔瘻二件、馬脾風（ジフテリア）二件、卒中二件、喘息一件、複合五件となる。

治療方法も同じく代診記録・表1をみてみると、水蛭付（瀉血）七件、キリストル四件、投薬三件、刺絡（瀉血）二件、エレキテル一件、カテートル一件、膏薬一件、糸通し一件となる。これらの治療方法は如何なるものであったのか。水蛭付は水蛭を皮膚に付け血を吸わせて瀉血する治療法で「江戸日記」では眼病治療等の際に行われている。平安時代か

ら日本で行われていたが江戸時代中期以降行われなくなり、その後蘭方医学が受容され再び行われるようになった。⁵⁹ 刺絡も瀉血であるが、こちらは針を刺して血液を排出する、より積極的な方法である。「江戸日記」では卒中の治療に行われている。オランダの臨床学者ブルハーフエ（一六六八―一七三八）をはじめとする機械論者は身体を機械に見立て、血液循環の仕組みを身体運動の基本とした。病気は血管と血液の相互作用の故障により発生し、炎症は血液が血管を通りにくいか閉塞したために起きると言う理論である。⁶⁰ ドイツ人フリーランド（一七六二―一八三六）の書籍が舶載され、あらゆる病気の予防法としても活用すべきとの主張により瀉血が活発に行われるようになった。⁶¹ キリストルは流腸のことである。漢方でも昔から行われていたが宇田川玄随『西説内科撰要』に流腸法が吉利詞爹兒（Klyster）として記載され「我が医家ガ方式的ニ流腸ノ法ヲ用フルニ至リシハ、西洋医方行ハレテヨリ以来ノコトナリ」と述べられている。カテートルは『日本医学史』に「葛底帝兒（Katheter）ニテ尿ヲ導クノ法モ亦西洋ヨリ伝ハリ、天明・寛政ノ頃ニハ尿閉及ビ淋疾ノ治ニコノ機械ヲ用ヒ（以下略）」とある。尿閉や淋病の治療に使われたようである。エレキトルという記載も日記にはあるがどのように治療に使われたのか日記の記述だけでは不明である。西洋で治病に使われるようになったのは弘化四（一八

四七）年頃からで、日本では安政六（一八五九）年の『内服同功』にエレキテル療法が挙げられていると言う。⁶² そうであれば金武良哲が象先堂時代に行ったエレキテルは、早い段階での治療への導入であった可能性がある。糸通しは痔瘻の治療として行われた。陳実功『外科正宗』に薬線結紮療法として、本間葉軒『瘍科秘録』に薬線緊紮の法として糸通しが記載されていることを岩垂純一氏が指摘しており、それと同様の治療法かと思われる。

「江戸日記」の天保十二年四月十三日条には、玄朴の友人、戸塚静海の手術見学の記述があり、「主力は戸塚先生ナリ、其手ギハ頗ル上出来」と感想が書かれている。同じような状況が佐渡の蘭学者柴田収蔵の日記にも見られる。⁶³ 外科で評判の高い戸塚静海の手術等がある際は見学も可能であり、またとない臨床学習の場であったと推察する。

次に治療に使われた薬剤であるが、日記の記載を見ると漢蘭両方が使用されていることがわかる。蘭方としてはヤラツバ（緩下剤）、ジギタリス（強心利尿薬）、牛膽丸、ワス腎、ホルトガル（オリーブ油・膏薬として）などが使われている。漢方としては、桂花（解熱）、茴香（胃腸薬）、桂枝湯（風邪の初期）、水桂、發表劑（桂枝湯等）、蠟・蒲黄（膏薬として）などが使用されている。蒲黄、ホルトガル（オリーブオイル）、蠟を混ぜて膏薬（いわゆるガマの油のようなもの）を

作ったり、ヤラツパというヒルガオ科の植物を使って細葉を作り薬詰にしたりと、薬の調査も行っていたようである。

三 江戸における会読とネットワーク

「江戸日記」によると、金武は象先堂と大槻俊斎宅の二ヶ所で会読に参加している。大槻俊斎は文化元（一八〇四）年、陸奥国生まれで手塚良仙らに学んだ後長崎に遊学、玄朴に出会い友人となる。長崎では高島秋帆に砲術も学んでおり、江戸に戻ってからは玄朴宅の近隣、下谷練塀小路に開業した。後に仙台藩医となっている。玄朴とともにお玉が池種痘所の設立に貢献し所長となった。¹⁷以下に「江戸日記」に記載されている書籍を使った修業（会読・写本）の記録をまとめ（表2）、それをもとに分析する。

まず、象先堂で行なわれた会読（天保十一年七月・天保十二年四月）についてみてみよう。会読の開催日は二二日が三回、二六日が一回、六日が一回、七日が一回となっている。これら六回の記録から推定するのは難しいが会読開催が例えは一の付く日、六の付く日というように決められていた可能性が高い。次に開始時刻であるが夜五つ（二〇時）が二回、夜五つ半（二一時）が二回、単に夜と書かれた日が二回である。会読は全て夜間に行われており医業を終えた後に玄朴が夜間行ったのではないかと推察する。

会読時の教科書についてはブルーメンバッハの『人身究理基礎』（Grundbegriffen der naturkunde van den mensch door Blumenback, J.F.）が使用されている。¹⁸これはゲッチンゲン大学医学教授のドイツ人¹⁹ブルーメンバッハの生理学教科書を「フォスマールが蘭訳したもので、金武文書にあるのは第一節から第二八節までの抜き書きである。²⁰金武の蔵書目録にも記載がある。会読に玄朴を選んだ蘭書は診察にすぐ役立つ臨床医学分野ではなく、基礎医学の分野に属する身体の機能を学ぶ生理学書であった。この原著は天保十（一八三九）年に長崎に一冊、舶載されたことがわかっており、玄朴がそれを入手してすぐに象先堂で教科書として使用したとすると、特に生理学書を選んだわけではなく、最新の舶載医学蘭書という観点で会読に使用したとも考えられる。適塾の塾頭であった村田蔵六（大村益次郎）が安政三（一八五六）年江戸に開いた鳩居堂では、学力によって等級を十にランク付けしていたが、その四番目に当たる下三というレベルで同じく「人身究ビルメンバック」を教えたことが学則からわかっている。²¹象先堂の教科書については玄朴はマートシカッペイの文法書を塾課と定めていたと言われる。²²これはオランダの共益社が刊行した初心者向け文法論『ガランマチカ』、中級編ともいべき文章論『セインタキス』を指す。順にこの二つを学ぶことは緒方洪庵の適塾でも行われていた。²³しかし、「江

戸日記」には象先堂での和蘭文法書会読の記載は全くない。金武に関しては和蘭語の学習は大槻俊斎塾でウエイランドの文法書会読を行っており、医学については象先堂でブリュメンバツハ『人身究理基礎』の会読を行っている。入門前に既にある程度の蘭語は身に付けていたことに起因しているとも考えられるが、塾での学習に際しなんらかの選択を行っていた可能性もあろう。

会読参加者は門人帳から名前を照合すると象先堂からは朝見啓（桂）順（奥州白河藩）、堤柳翠（肥前小城）、徳岡佐門（播州酒見北條）、片岡如軒（讃岐高松藩）、室岡徳勇（融）（陸奥盛岡藩）、河野又玄（出羽米沢）、岡口等（肥前平戸藩）、伊東宗準（伊勢津藩）、伊藤玄民（下野烏山藩）、金武良哲（肥前佐賀）が参加している。坪井信道の日習堂からは蒲原仲哲（肥州佐賀）が参加、所属塾不明な者として門次、勇玄、勇次、文恭、玄東、植二の六名がいる。

次に大槻俊斎宅で行われた会読（天保十二年七月～九月）をみてみよう。会読開催日は二五日が三回、一二日が一回、八日が一回、十八日が一回、十七日が一回である。五、八の付く日は会読日であった可能性が高い。会読開始時刻については六つ半（十九時・先生帰宅遅く会無）、夜五つから九つ（二〇～〇時）と言った記載があり、会読は夜間に行われており、玄朴同様、医業を終えた後に俊斎が行ったと推察する。

会読使用教科書は「文法書」と記載があるものと「ウエイランド」が使用されている。どちらも当時、オランダ文法書の基本であった『ガランマチカ』『セインタキス』より上級とされているP. Weilandの文法書を指していると考えられる。その他、『アールド之アルゲメーターフルシユクト之編』を讀み合わすとの記載もあるが、これは地理書、Aardrijkskundeの総論Algemeenoverzichtのことであろうと板澤武雄氏が述べている。

次いで会読参加者であるが象先堂からは金武良哲（肥前）、坪井信道の日習堂からは蒲原仲哲（肥州佐賀）、鹿田文山（賀州金沢）、中西八郎助（肥州武雄）が参加している。その他、所属塾不明な者として有二がいる。

象先堂と大槻俊斎宅での会読に参加していた者はどのような人物であったのか。日記の中に登場する学習者を塾別に挙げてみる。

- ・象先堂門人（啓（桂）順、柳翠、佐門、如軒、徳勇（融）、等、宗準、玄民、又玄、玄泉、高井玄順）
- ・坪井信道門人（仲哲、八郎助、文山）
- ・所属塾不明門人（宗活、門次、文恭、勇次、玄東、勇玄、植二、有二）

この中で日記に度々登場する佐賀藩出身者二名についてその来歴を以下に記してみる。まず、蒲原仲哲である。象先堂

の門人帳にはその名がなく坪井信道の門人帳に肥前佐賀之住人早津江「蒲原仲哲」とある。仲哲は天保十一年八月十一日に故郷に残してきた子どもが亡くなり、妻も大病の旨書状が届き、その二日後には帰郷の途についたことが「江戸日記」に記されている。坪井信道に入門したのが天保十一年四月なので信道の日習堂で修業したのは実質四か月と非常に短期間であった。帰郷後、嘉永七（一八五四）年の佐賀藩龜帳の蓮池町に白石鍋島直章、山城殿医師として記載されている。佐賀藩医業免札姓名簿には蒲原仲哲本人と門人三名（内一名は息子）の名があり⁽⁷⁶⁾帰藩後、順調に医師としての道を歩み、藩医として取り立てられ、更には門人も育てていることがわかる。広瀬元恭の時習堂門人帳に仲哲と同じ肥州早津江出身の蒲原仲碩の名前があり兄弟が親族であろう。

次に中西八郎助である。象先堂の門人帳には名前がなく前述の蒲原仲哲と同様坪井信道の門人として肥州武雄出身の中西八郎助の名前がある。武雄は佐賀藩の自治領であるが十二代領主鍋島茂義が蘭癖大名と呼ばれるくらい積極的に西洋文化を受容、義弟である本藩藩主鍋島直正にも多大な影響を与えた。茂義は砲術家高島秋帆に自ら入門、砲術を習い家臣たちにも教授している。天保六（一八三五）年、武雄の家臣四人が茂義に砲術修行の血判状を提出しているが、この四人の中に中西八郎助の名前がある。さらに鍋島茂義と側近が

記録した長崎での物品注文・購入・修理等の記録である「長崎方控」⁽⁷⁹⁾の天保九年戊戌正月の冒頭に「中西八郎助へ申付候品三月十五日参ル」と輸入した時計に関連した記載があるので、藩の上層部近くに仕えていた者であったことが推測される。また高島秋帆が天保十二（一八四一）年五月、武州徳丸原にて西洋式練兵、大砲の発射訓練を行っているが八郎助がその出府に関わっている。八郎助が藩主茂義の御側頭人である木村仲兵衛他に宛てた書状に

此節高嶋四郎太夫出府に付、平山醇左衛門同伴致され、先月七日当地着、同人へ面会其御地の御様子共、委敷承り候（中略）、然者、当春大御所様御薨去候二付、先月始此ハ御停止仰せ出し相成り、此節の義、格別厳重御取⁽⁸¹⁾にて無双の栄地も当時至つて寂寥たる事共にて御座候

とある。八郎助は坪井信道の門人でありつつ大槻俊斎にも入門しており、大槻の住み込みの塾生であったのか、金武が大槻俊斎宅へ八郎助の病を診察に行った記述が日記にある。大槻俊斎自身も高島秋帆と長崎で机を並べた仲で親しい間柄であった。その影響もあってか大槻も兵学に執心な蘭学者であり、八郎助の入門はその関係であったとも考えられる。また大槻俊斎は天保十二年に高島秋帆から痘苗を受け取り、江戸

において種痘を初めて行ったとも伝えられる。⁸³⁾

佐賀藩出身ではないが、金武の直後に象先堂に入門し、度々日記に登場する播州出身の門人に徳岡左門がいる。坪井信道の門人帳にも名前がある。日記によると左門は天保十一年七月二三日に退塾を願い出、それにより金武が伊東の弟と考えられる若先生から叱られている。左門は前日に浅草へ燈籠見物に出かけているから、それに関して塾から咎められるようなことがあったのかもしれない。その後、八月七日に玄朴が往診した際に左門が供奉しているため退塾は思い直したのであろう。佐門は象先堂入門の際、加東郡三草藩主丹羽家の請により最上席家老鈴木氏と同道して三草を出立している。天保十二年に帰藩したが出仕はせず在地で種痘の普及に尽くした。⁸⁶⁾

このように近世後期の江戸において象先堂周辺では著名な蘭学者たちとそこで学ぶ門人たちのネットワークが広がりをを見せていた。それは金武の修業や知識形成にも少なからぬ影響を与えたと推察される。

前述した塾別の会読参加者数は、象先堂門人十名、坪井信道門人三名、所属塾不明者七名となる。所属が不明であったも、象先堂や大槻俊斎宅での会読に参加しているわけであるから、蘭学を学ぶ志の者であることは間違いない。蘭学塾とは言わないまでも、蘭学者が門人を取って教えている場合は

少なからずあった。例を挙げると、戸塚静海の塾について管見では史料が目に入らない。しかし、佐賀藩の佐野常民は『医業免札姓名録』に「戸塚静海門人」と記載されている。⁸⁷⁾大槻俊斎についても門人を取っていたと言及される史料は見当たらないが、金武などをはじめ大槻宅で会読に参加している者は存在するし、「江戸日記」には中西八郎助が入門したという記載がある。近隣の蘭学者の門人が象先堂や大槻宅でも蘭学を学び、会読には時折参加するものの、束脩料を払わず門人帳に名前が載らないという多様な学びのケースがあったのではない。伊東玄朴と坪井信道、大槻俊斎、戸塚静海など塾主どうしが懇意の場合、特にそのような融通も図られたのであろう。海原徹氏は私塾の就学形態について、学習が「まったく来学者の発意によって」おり「ひんばんに出入りし、断続的に学ぶ」というスタイルが「同時にいくつかの私塾に学ぶことをも可能にした」と指摘している。⁸⁸⁾一方でこのような形態は医学塾や洋学塾では「高度な専門性をともなう医学教育を行うために、段階的カリキュラムがどうしても必要」であり、「出入りのはげしい短期間の学習で、外国語の修得などとうてい望めなかったことは想像に難くない」と論じている。⁸⁹⁾しかし、この象先堂と大槻俊斎塾の門人の行動と会読への参加を見ると、あながちそうとも言い切れないのではないかと考えられる。蘭学塾においても、所属塾に縛られない大

きなネットワークの中で自由に知識を深めていける環境が、象先堂の周囲には存在したと推察する。

蘭学修業には会読とともに写本が重要である。会読のテキストにもなれば、蘭語学習や医学の実践にも欠かせない教科書となる。金武の写本に関する日記の記載は後半部分、天保十一（一八四〇）年十月から天保十一年十二月の間に集中している。天保十一年七月十七日条に「箕作阮甫へ原書の儀二付行」という記載がある。箕作阮甫は江戸在住の津山藩医で天保十（一八三九）年六月、つまり金武が出府する直前に天文方蕃所和解御用に勤務し始めた。「原書の儀に付行」という日記の記載を見ると、玄朴と蕃所和解御用の箕作の間で何らかの蘭書に関する提携があったのではないかと推察される。

この記述の三か月後から金武は箕作宅を訪れ『ガランマチカ』や『セインタキス』、『ゾーフ辞書』などを借り受けて積極的に写本を作っている。アルファベット一文字分の写本を借りて、写し終ると返却し次の一文字分を借りるといった方法であった。当時絶大な人気を誇ったオランダ語辞書『ゾーフ』は緒方洪庵の適塾や佐賀本藩の蘭学寮にも一揃えしかなかった。その貴重な辞書を塾生が奪い合って学習するという当時の状況で、幕府天文方の箕作阮甫から直接借り出し写本できるという恵まれた環境が、象先堂周辺に形成されていたのである。前出の播州出身徳岡左門が高い学費を出してまで

江戸遊学を決心した動機の一つには、象先堂入門により膨大な蘭書が自由に読めると言うことがあった。⁹³玄朴は高額な蘭書を多数所蔵していると有名であったが、それに加えて蕃書和解御用の蘭書も箕作阮甫の便宜により貸出され、閲覧・手写可能となっていたわけである。表2を見ると、修業期間の前半が会読で後半が写本と明確に分かれていることに気付く。修業の後半期間に写本の記述が集中していることから、自分の学習用と同時に佐賀へ持ち帰って蘭学教授で使用する目的もあったと推察する。遊学と言っても自己の修業のためばかりでなく、藩の御役に立つという目的も当然あったであろう。修業の年限が近づき写本に集中している様子がみられる。

金武文書には、象先堂時代のものではないかと考えられる手写本が他に数点ある。GENESKUNDEと題された写本には「象先堂図書記」の蔵書印が付いている。板沢武雄によると英国人Richard Reeceの新篇家庭の医学Nieuwe huiselijke geneskunde, Amsterdam, 1819の1部であろうと言ふ事である。⁹⁴Kalkwater Gerstewater Howskeelと題された手写本も金武文書にあり、こちらも「象先堂図書記」の蔵書印が付いており、上記リースの書の一部と板沢は述べている。⁹⁵伊東淵玄朴訳と書かれた『豪斯多辣利訳説 乾』という写本もあるがこれは金武の筆跡とは違うため、象先堂か

ら修業を終えて帰郷する際に前記の二冊とともに贈られたものではないかと推察される。

おわりに

本稿では佐賀藩蘭学者金武良哲の日記から彼が伊東玄朴の元、象先堂で行った代診や会読・写本などの修業を具体的に示し、それと並行して伊東玄朴の象先堂開塾前の知識形成の下地、天保後期象先堂の様相を探った。以下に本稿で明らかにした点を挙げる。

(1) 従来聞説されてこなかったが、伊東玄朴は義兄となる猪俣源三郎を助け天文方の職務であった役宅での和蘭語教授を行っていた。そこでの活動が後の玄朴の江戸での人脈を広げたのではないか。

(2) 象先堂開塾後、多忙となった玄朴は塾で自分を支える人材の紹介を師であった島本良順に依頼していた。金武もその一人であった可能性が高い。

(3) 金武の代診の患者層は旗本や大店の家族中心であり、往診の範囲は象先堂周辺と佐賀藩上屋敷・中屋敷の周囲であった。病の種類は胃腸病、頭痛、眼病、胸水等が多く、投薬は漢蘭折衷であるが治療方法は瀉血やキリストル、カテートルと言った蘭方医学中心であった。金武の修業は代診が中心の実践的なものであり書籍を使った修業は比較的少な

い。

(4) 象先堂での会読については使用された教科書はブリュームンバッハの生理学書で玄朴が会頭となって夜間日を決めて行われていた。

(5) 大槻俊斎宅では当時人気の高かった『ガランマチカ』『セイタキス』より上級のウエイランドの文法書を使用し夜間俊斎が会読を行っていた。

(6) シーボルト門下であった玄朴の緊密な交友関係が塾の近隣に広がっていたため、門人たちは入手難な書籍の借用、他塾での会読、手術見学等が可能となった。玄朴から直接学ぶこと以外に彼の蘭学ネットワークによって質の高い修業が行うことができた。戸塚静海や大槻俊斎は玄朴が長崎修行中に会って以来の知己で当時の志を同じくする者同士の結果の固さがうかがい知れる。彼らは江戸在住となつてからは比較的近い場所に開業し、更に緊密な協力態勢が出来上がったと言えよう。伊東、大槻、箕作らは後にお玉が池の種類所開設の際も一致団結してその原動力となつて⁽⁹⁶⁾いる。

(7) 象先堂、大槻俊斎宅ともに坪井信道塾生はじめ他の塾生と思われる者達が会読に参加している。現在判明している蘭学塾以外にも蘭学者たちが門人を取って教えている場合が少なからずあったのではないか。金武も象先堂では医学書

会読、大槻俊斎宅では和蘭語文法書会読と使い分けており、自分の塾に縛られない学習の選択肢と学びのケースがあったと考える。

(8) 写本に関しては伊東玄朴の知己である天文方蕃所和解御用勤務の津山藩医箕作阮甫から当時人気の高かったオランダ文法書や蘭語辞書ツーフなどを借り写本を作ることができた。修業の後半に行われているので自身の学業のためのみでなく帰藩後、故郷で役に立つようにという意図もあったと考えられる。

象先堂に関する史料は少ない。一説によると東京大空襲で焼けてしまったとも言われている。門人の書き残した日記としては佐渡の柴田収蔵が記したものが⁵⁹⁾あるが、書かれた時期が嘉永期という象先堂の学問が医学から軍事科学方面へ転換されつつあった時期である。天保後期に書かれた『江戸日記』は初期象先堂の様相を伝え、若き蘭学者が知識を積み上げる過程を具体的に垣間見ることが出来る史料である。今後、佐賀県立博物館に寄託されている金武良哲文書をさらに整理分析し、近世後期の武士身分や代々医師でない家系の者がどのように新しい学問を習得し知識を形成していったのか、蘭書や写本を精査することによって解明したい。

注

- (1) 鍵山栄『佐賀の蘭学者たち』佐賀新聞社 一九七六年十月 八三頁
- (2) 杉谷昭『鍋島閑叟』中央公論社 一九九二年三月 三頁、二六頁
- (3) 中野禮四郎編『鍋島直正公傳』第二卷 侯爵鍋島家編纂所 一九二〇年十二月 一一六頁
- 「医学は数多の科に分かれたるを以て、教職のみ多きを要して徒弟の来り学ぶは少なく、旁々授業の実益を挙ぐる」と難しくして費用のみを要するにより、只試みに建てたるまでにて、さしたる発展を見ることなくして経過したり」とある。
- (4) 鍵山栄『佐賀の蘭学者たち』佐賀新聞社 一九八四年 十九頁
- (5) 同左 五二頁
- (6) 杉本勲「幕末洋学における西南諸藩の位置」『近代西洋文明との出会い』思文閣出版 一九八九年十月
- (7) 同左 九頁
- (8) 青木歳幸「佐賀藩蘭学再考」『医学史の視点から』『佐賀大学研究紀要第1号』二〇〇七年三月 五四頁
- (9) 国立歴史民俗博物館共同研究「地域蘭学の総合的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』二〇〇四年二月、佐賀

大学・佐賀学創設プロジェクト編『佐賀学 佐賀の歴史・文化・環境』二〇一一年四月 などに青木歳幸氏を中心として成果がまとめられている。

(10) 海原亮『江戸時代の医師修業 学問・学統・遊学』吉川弘文館 二〇一四年十一月

(11) 伊東栄『伊東玄朴傳』玄文社 大正五年

(12) 青木歳幸『伊東玄朴』佐賀新聞社 二〇一四年十二月

(13) 池田亮一編著『金武良哲』昭和五十九年十月

(14) 高田誠二「久米邦武と金武良哲の物理学手稿」『洋学・洋学史学会研究年報』一九九六年

(15) 前出『伊東玄朴伝』一頁

(16) 同左 二頁

(17) 同左 十三、十四頁

(18) 同左 二一頁

(19) 国史大辞典第六巻 吉川弘文館 一九八五年九月
六三五頁

(20) 前出『伊東玄朴伝』二六、二七頁、前出『佐賀の蘭学者たち』二五頁等

(21) 同左 三五頁

(22) 呉秀三『シーボルト先生其生涯及び功業』吐鳳堂書店
一九二六年十月 一二四、一二五頁

(23) 前出『伊東玄朴伝』二七頁

(24) 片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』吉川弘文館 一九八五年 三六五頁

(25) 同左 三六九、三七〇頁

天文台詰通詞の職務については片桐一男氏がその著作『阿蘭陀通詞の研究』で詳細に検討されている。それによると、幕府天文方では文化四（一八〇七）年、ロシアの来航が頻発した際にその対応のために長崎の通詞が出府を命じられ、天文台詰通詞として蝦夷地御用に従事するようになった。翌文化五年に出府した稽古通詞馬場佐十郎は蝦夷地御用が済んだ後も江戸に留め置かれ、高橋景保の下、蘭書の翻訳や地図製作に従事した。御用が済めば帰郷するはずの任務は佐十郎以降、長期化する。文化八（一八一）年には天文方内に「番書和解御用」を創設、佐十郎は仙台藩医大槻玄沢とともにこの御用にもあたった。その任務は一つに海外事変に備える和解御用、二つ目にシヨメール百科辞書の訳述であった。

(26) 『鷹見泉石日記第二巻』古賀歴史博物館 二〇〇一年九月 一〇九頁など

(27)、(28) 前出『伊東玄朴伝』四一頁

(29)、(30) 同左 四二頁

(31) 同左 四三、四四頁

(32) 同左 一二二頁

(33) 同左 一二二、一二三頁

(34) 海原徹『近世私塾の研究』一九八三年六月二八一頁
参考までに日習堂入門式を左に記す。

日習堂入門式

束脩

金百疋

扇子料

金五十疋

奥方

金五十疋

塾頭

金五十疋

塾監 二人

各人二半紙二帖

他同僚諸子

半紙一帖宛

僕一人

錢二百文

右ノ外中元ト歳暮ニ塾生一人毎ニ黑豆一升宛ヲ呈ス。

(35) 同左 二八三頁

(36) 同左 二八二頁

(37) 前出『伊東玄朴伝』一三四、一三五頁

(38) 同左 門人姓名録 武田斐三郎(伊予大州藩士、五棧

郭の設計者)、津田真一郎(津山藩出身、明六社結成)松木

弘安(薩摩国出身、維新後外務卿)肥田濱五郎(豆州出身、

日本造船の父)、神田孝平(美濃国出身、数学者、維新後貴

族院議員)

(39) 中野禮四郎編『鍋島直正公伝』第一卷 侯爵鍋島家編
纂所 一九二〇年十二月 三一、三二頁

金武良哲の生立ちについて以下の記載がある。

茲に又一の奇人あり。佐賀の六座町に銅細工をなして細き煙を立てたる者の子なり。素質極めて魯鈍なりしが、成童の頃、近隣の小商及び八百屋の子と三人相交はりて親善なりしに、一日小商の子の、町人に生まれては、土藏作りの家に住まはずては生甲斐なしと歎ぜるに對して、八百屋の子は、予はやはり一生天秤棒をもて野菜を担ひ売り廻るまでよいひたり。かくて、二人は銅工の子をも促して其志を問ひたるに、彼は黙々二人の言を聴くのみなりしが、徐ろに頭を挙げて、予は侍にならんと思ふと答へたりしかば、二人はあきれて、馬鹿は馬鹿を言ふよと後言したりしが、程へて彼は銅職を廢てて医家の学僕となり、余暇に漢字を覚えんため刻苦勉強して倦まざりき。されども鈍才とて学は更に進まず、為に頗る困じ居しに、偶々蘭書は二十六文字を記憶すれば読み得らると聞き、さらばとて島本龍嘯の学僕に住替へ、更に刻苦して遂に原書を読み得るに至りしかば、山村良哲と称して町医を開業し、蘭方を以て世に名を馳せ、嘉永年間に至りては、時の執政鍋島安房の侍医に聘せられたり。前に嘲笑せし八百屋これを聞いて、人の奮発は怖ろしきものかな、人は已に蔵を建て、住み、馬鹿の彼兒は侍になりかけたりとて驚嘆したりとぞ。後、公の医学

校好生館を拡張せらる、や、良哲は遂に一代侍として教授に任ぜられたり

(40) 前出『金武良哲』 四七頁

(41) 佐賀大学地域学歴史文化センター編『小城藩日記』にみる近世医学・洋学史料後編 二〇一〇年三月 七一頁

(42) 同左 二四頁

(43) 大概如電の『日本洋学編年史』の天保四年に「伊東玄朴、更に學舎を下谷に築き、「象先堂」と称す。来学者頗る多く（以下略）」とあるほか、『伊東玄朴伝』にも「御徒町の家は（中略）建築成りて後も患者群集し玄關も腰掛等も明間もなく街路に彷徨して番を待つ人さへあり果は宅の前に掛茶屋飲食店など出来る程になりたり」とある。増人数は前出『伊東玄朴伝』門人姓名録より換算。

(44)、(45) 金武良哲文書・日記

(46) 前出『佐賀の蘭学者たち』 八四頁

(47) 金武良哲文書・日記

(48) 『多久市史第二巻近世編』二〇〇二年十二月 五三四頁

(49) 前出『金武良哲』 五六―五九頁

(56) 深井雅海・藤實久美子編『江戸幕府役職武鑑編年集成

26『東洋書林 一九九八年十一月 五八頁

(57) 前出『伊東玄朴伝』挿絵

(58) 『嘉永・慶応 新江戸切絵図』人文社 二〇一〇年九月

(59) 富士川遊『日本医学史』形成社 一九七二年八月 五八三頁

(60) 笠谷和比古『一八世紀日本の文化状況と国際環境』思文閣出版 二〇一一年八月 一〇六頁

(61) 同左 一〇九頁

(62) 前出『日本医学史』 五八六頁

(63) 同左 五八七頁

(64) 同左 五九二頁 エレキテルは和蘭語 *electriciteit* の略で平賀源内が長崎にて蘭館に出入りし発電機を見てその理法を伝えて江戸に戻りその効能を説いたことが有名である。

(65) 岩垂純一「専門医としての肛門科の存在意義」『日本大腸肛門病会誌 67』二〇一四年 九四〇頁

(66) 田中圭一・成田美紀子『柴田収蔵日記』小木町史刊行委員会編 一九七一年十月 一四一頁

「玄桂子戸塚之乳癌の治療を見に行く」との記述あり。

(67) 日蘭学会編『洋学史事典』一九八四年九月 一一〇頁

(68) 佐賀藩旧蔵蘭書目録 平成十六年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究（1）「蘭学基礎資料の調査研究」研究報告書 二〇〇四年九月 松田清編 八四頁

- (69) 永積洋子「十八世紀の蘭書注文とその流布」一九九八年三月 一九九五年度～一九九七年度科学研究費補助金基礎研究 (B) 研究成果報告書 四六頁
- (70) 前出『近世私塾の研究』二四五頁
- (71) 前出『日本洋學史年表』四四九頁
- (72) 福澤諭吉『福翁自伝』慶應義塾 二〇一二年四月 七八頁
- (73) 前出『金武良哲』二〇頁
- (74) 国立歴史民俗博物館 地域蘭學者門人帳人名データベース <http://www.rekinakuac.jp/up.cgi/searchrd.pl>
- (75) 前出『佐賀城下町竈帳』三二七頁
- (76) 青木歳幸「佐賀藩『医業免札姓名簿』について」『地域学歴史文化研究センター研究紀要』3号 平成二一年三月 四一、五〇、七〇頁。医業免札姓名簿は佐賀藩医学校(好生館)での開業試験による領内医師の免許制度実施簿。
- (77) 前出地域蘭學者門人帳人名データベース
- (78) 武雄市歴史資料館へようこそ(武雄市歴史資料館ホームページ) 武雄蘭学館から「武雄領から佐賀藩へ」
http://www.epochal.city.takeo.lg.jp/lib_his/history/histoph.html
- (79) 武雄市図書館・歴史館編『蘭学の来た道』二〇〇四年十月 十二頁
- (80) 同左 七頁
- (81) 武雄史編纂委員会編『武雄史』上巻 昭和四七年三月 七〇七頁
- (82) 武雄市図書館・歴史資料館編『蘭学の来た道 武雄領主の買いもの帳』二〇〇四年十月 七頁
- (82) 片倉舜『大槻俊斎』発行片倉舜 一九八五年九月 一四七頁
- (83) 古賀十二郎『長崎洋学史』下巻 長崎学会編 一九六七 年 三二四頁
- (84) 前出地域蘭學者門人帳人名データベース
- (85) 金武の江戸日記中に伊東玄朴の弟池田玄随が象先堂で門人を取るなど教授をしている様子がみえる。
- (86) 三枝啓介「種痘の先覚徳岡左門」神戸史学会『歴史と神戸』第24巻5号 一九八四年 三六～三七頁
- (87) 前出「佐賀藩『医業免札姓名簿』について」五五頁
- (88) 前出『近世私塾の研究』三七頁
- (89) 同左 三八頁
- (90) 同左
- (91) 『津山郷土館報第8集 箕作家勤書』市立津山郷土館 一九七六年三月 七頁
- (92) 前出『福澤諭吉集』九六～九七頁
- (93) 前出「種痘の先覚徳岡左門」三八頁

(94) 前出『金武良哲』二〇頁

(95) 同左 二〇頁

(96) 『伊東玄朴伝』九〇〜九二頁 戸塚静海の略歴を以下に記す。

戸塚静海 寛政十一（一七九九）年生まれ。掛川藩町医の三男。宇田川玄真に師事、長崎へ行きシーボルトの門弟となり玄朴と出会う。江戸に戻り開業、後に薩摩藩医。

(97) 前出『柴田収蔵日記』

<象先堂・金武良哲代診記録> 天保10年10月～同12年4月

(表 1)

治 療 日	患者居住地	患者氏名 (年齢)	患者身分	病名・症状	治療方法	備 考
天保10年10月 9日	長者町小等原 侯下屋敷	間宮富兵衛	武家	痔瘻	糸通	
〃 10月13日	鎧丁	大坂屋娘	町人	眼病	蛭附	
〃 12月25日		真寄勝右門小兒 (3歳)	武家	馬飛風		3日で死去
天保11年 2月 9日	上野町	清水新八	武家	眼衝衝	左右ノスラブコイルニ蛭 附ル。	酒食あり。歌学のメース。
〃 2月10日		中屋三吉 (55、6歳)	武家	頭蓋骨の潰瘍。自殺セント 欲スル程ノ頭痛。		ノートウエンゲヘワートルホ ーフト之直症ト見ヘタリ。
〃 2月11日	南大門町	新太郎小兒(2歳)	町人	正症之馬痺風。当月2日頃 より軽い咳、漸々発進、呼 吸塞迫、喘鳴、腹満、真視。		
〃 2月12日	鳩組屋敷	上村新兵衛小兒 (5歳)	武家			
〃 3月 5日	和泉橋川原端 佐久間丁	大坂屋半兵衛小兒 (3歳)	町人	安痘。服満、発熱、呼吸短 塞、喘鳴、便通微小、ウナ リ声、血色失フ。	ヤラッパ3分、桂花茜香 可、浣腸、ヂギタリス	ヤラッパの刺激ニテ即死ス。
〃 3月11日		田川丈右衛門女兄 (3歳)	武家	発熱、腰ヒヨヒヨ、精心錯 乱、面部頭中痘状発ス。		
〃 3月18日	松永町	大工八歳	町人			
〃 7月17日		羽室重蔵妻	武家	産後水腫腫症		
〃		房州屋内嘉兵衛	町人	胸水		
〃 7月21日	浅草新堀バタ	松平内記様	武家		キリストル (浣腸)	見舞 (往診のこと)
〃 7月25日	浅草新堀バタ	松平内記様	武家			代診
〃 8月 5日	尾川町	稲葉豊後守様御屋 敷内、大崎権蔵妻	武家	眼病	水蛭付	
〃 8月 6日	立身坂	河尻様内小倉常 助、駿河殿妻	武家			
〃 8月 6日	浅草新堀バタ	松平内記様等	武家			見舞 (往診)

〃	8月7日		男子(13歳)	町人	小腹疼痛、睾丸愀衝、膿	膿の潰れた箇所にカテー トルを施し膿を排出。	灰白色で少し赤色の混じった 粘流膜を帯びた塊が出た。
〃	8月8日		岡本仁左衛門小兒 (8歳)	武家	腹痛、微嘔	牛膽丸、健胃剤、桂枝水	3回ほど用いて回復。
〃	8月12日	深川小河町	近江屋嘉兵衛妻	町人		胸腹腎等に水蛭付。	
〃	8月14日	浅草稲荷町	小間物屋伊勢屋惣 助妻	町人			
〃	8月14日	長谷町	都屋主人	町人	片頭痛、歯痛	水柱を施す。	
〃	8月19日	新堀	本岐氏小兒	武家	吐下、全身変急		
〃	8月19日	本郷春木町	近藤石見守御家老 長瀬与兵衛倅(18 歳)	武家	喘息		11歳より発病。
〃	8月20日		上州助三郎	武家			
〃	8月26日	山下	井上嘉平次妻	武家	胸水病		
〃	8月27日	山下	井上嘉兵次妻	武家	胸水症真症。脈遅弱、面、 腹、足等に軽き水腫、皮膚 乾燥、呼吸喘鳴、眩暈、気 絶		胸水症真症とみたり。 17年以前初産をなし(中略) 毎歳五六ずつ患寒発熱他。
〃	8月29日	浅草新堀	木村義兵衛	武家	卒中	刺絡	粘滑墨色之血二十日程出る。 昼八つ頃死す。
〃	9月1日	長谷町	内藤長次郎	武家	卒中	刺絡	百二十日出。体質強壯。
〃	9月2日		坂井終理太夫様浦 夏本勇太郎	武家			診察
〃	9月11日	松平内記様内	松浦軒筆妻	武家			
〃	9月11日	松平内記様内	斎藤鉄蔵	武家	大腸に病	發表剤(発泡剤?)	
〃	9月14日	横山町	大坂屋	町人		ホルトガル、ワス腎を練り 綿延にて両膝に付る。	夜六つ半頃迄留守を預かる。
〃	9月15日	横山町	大坂屋	町人		蒲黄ホルトガル蠟三昧之膏 藥を練り綿延べる。	延べ九枚拵える。
〃	9月16日	松平様御内	松浦勘平	武家	痔瘻		瘻、大凡落ちる。
〃	9月19日	横山丁	大坂屋	町人			見舞(往診)
〃	9月19日	長谷川丁	都屋源助	町人		蛭付	

〃	9月23日		大坂屋庄助	町人			見舞（往診）
〃	9月23日		松平啼之助様	武家			見舞（往診）
〃	9月24日		松平啼之助様	武家		浣腸法	
〃	9月24日	桜田御屋敷	大工三蔵	町人			
〃	9月24日	新堀	松平啼之助様	武家		浣腸法	
〃	9月25日	横山町	大坂屋庄助	町人			見舞（往診）
〃	9月25日	長谷川丁	都屋源助	町人		水蛭付	
〃	9月27日	横山町	大坂屋庄助	町人			見舞（往診）
〃	9月28日	左門町	中村屋彦衛門	町人			見舞（往診）
〃	9月29日	浅草新堀バタ	松平内記様	武家			見舞（往診）
〃	10月 3日	浅草新堀バタ	松平内記様	武家			見舞（往診）
〃	10月 4日	浅草新堀バタ	松平内記様	武家		浣腸法	見舞（往診）
〃	10月 8日	浅草新堀バタ	松平内記様	武家			見舞（往診）
〃	10月14日	浅草新堀バタ	松平内記様	武家			見舞（往診）
〃	10月15日		都屋源助	町人			見舞（往診）
〃	10月15日		大坂屋庄助	町人			見舞（往診）
〃	10月16日	池之端	菊地容齋（日本画家）	武家			見舞（往診）
〃	11月 6日	松平内記様内	上坂氏妻	武家			
〃	11月 6日		本岐小兒	武家			
〃	11月 7日		本岐	武家			見舞（往診）
〃	11月17日		三味線大岡様	武家			見舞（往診）
〃	12月10日	横山町	大坂屋庄助カミ様	町人	片頭痛		
〃	12月18日	御屋敷	井上嘉兵衛	武家	下疳		使の毘太郎が来る。
〃	12月19日	溜池御屋敷	諸田孫七	武家	痔瘻		
〃	12月22日	松平内記様内	おみき	町人			
〃	12月22日		本岐道平	武家			見舞（往診）
〃	12月26日	天皇橋	三宅捨蔵	武家			見舞（往診）
天保12年 3月 3日	俵丁	尾張屋娘（6歳）	町人	腹部塊			
〃	4月13日		人見七兵衛	武家		陰茎切断	主力は戸塚静海。手際良し。
〃	5月 6日	牛込二十騎町	添戸清兵衛	町人		エレキトル	

＜象先堂・書籍を使った修業（会読、蘭書の写本等）の記録＞ 天保11年7月～同12年4月

（表 2）

日 付	場 所	内 容	時 刻	参 加 者 と 所 属 塾	備 考
天保11年 7月17日	箕作元甫宅	原書の儀ニ付行。			
〃 7月21日	伊東玄朴宅	ビュルメンバックの会。	夜五つ（20時頃）より。	伊東塾生：啓順、柳翠、佐門、如軒、 徳勇、良哲 坪井塾生：仲哲 不明：門次、勇玄、勇次、 文恭、玄東	
〃 7月22日	大槻俊齋宅	ウェイランドフォーギング 会読。	夜六つ半（19時） 頃行く。	伊東塾生：良哲 坪井塾生：仲哲、文山	先生、帰宅深更にて吉原燈籠 見物へ。
〃 7月25日	大槻俊齋宅				会無之候。
〃 8月 6日	伊東玄朴宅	人身究理書ノ会。	夜	伊東塾生：柳翠、佐門、又玄、徳融、 等、良哲 不明：植二、玄東、	
〃 8月 8日	大槻俊齋宅	文法の会。	夜	伊東塾生：良哲 坪井塾生：仲哲、文山 不明：有二	
〃 8月21日	伊東玄朴宅	人身究理書生力編ヲ会ス。	夜五つ半頃（21 時頃）より。	伊東塾生：宗準、等、柳翠、玄民、 左門、徳勇、良哲 不明：文恭、玄東	
〃 8月25日	大槻塾	ウェイランド、アールド之 アルゲメーターフルシケ ト之編ヲ原書ト読合ス。	夜八つ半（15 時）。		
〃 8月26日	伊東玄朴宅	会	五つ半頃（21時 頃）。		先生帰宅して始まる。寝入り 会ノ後ニ寢覺ス不都合也。
〃 8月28日	大槻俊齋宅	大槻之会。	夜五つ頃（20時 頃）より 九つ前（0時前） に帰る。		
〃 9月17日	大槻俊齋宅	大槻文法書会			
〃 9月21日	伊東玄朴宅	ビュルメンバック会ス。			会頭玄朴。
〃 10月27日		ゾーフa字ノ篇成就ス			

〃 10月28日	箕作元甫宅	ゾーフa字ノ部返却、又z字ノ部ヲ借用ス。			
天保11年11月 5日	箕作元甫宅	マードシカッペイ受取ニ行ク。			先生（箕作）留守。
〃 11月13日		セインタキツヲ写始ル			
〃 12月16日		セインタキスヲ写シ終ル			
〃 12月17日		ゾーフu字ノ部ヲ写シ掛ル。			
〃 12月28日	箕作元甫宅	ゾーフu字ノ部返済ス。			
天保12年 4月 7日	伊東玄朴宅	ビュルメンバッフ心臓之生力ノ勢之部会。	夜五つ頃（21時）より		
〃 4月25日	大槻俊斎宅	八郎助と対してカランマチカ動字ノ部ヲ相談ス。		伊東塾生：良哲 坪井塾生：八郎助	